

心の痛み

井口 昭久

私はアトピー性皮膚炎による痒みに悩まされている。成人のアトピー性皮膚炎が、金属アレルギーと関係していることがあるらしいことが最近分かった。私の肉体で金属が接触しているのは歯である。

ヒトの細胞には動的平衡を保ちながら生まれ変わる細胞と、生まれた時の細胞が一生変わらない細胞がある。

歯はどちらにも属さない不思議な臓器である。ほとんどの臓器は胎内から存在するのだが、赤ちゃんは歯を持って生まれてこない。歩き始める頃より生えてきて、ようやく生えそろうた頃には抜け始める。可愛い孫娘が、

おばあさんと同じ口元になる。乳歯がぐらぐらして抜けると、遺伝子に誘導されて、永久歯が生えてくる。永久歯は障害を受けると再生されることはない。

私は、かかりつけの歯医者に相談して、少年期から青年期に亘って詰めてきた金属を取り除くことにした。

歯には私の歴史が詰め込まれている。

先日の授業で学生たちに「虫歯がある人は手を挙げて」と聞いてみた。手を挙げる学生はいなかった。誰も虫歯を持っていないということだった。「歯医者に行ったことがない人は？」と質問したところ、一人だけ手を挙

げた。五十人の中で四十九人は虫歯になったことがあり、歯医者へ行って手当てをうけていた。五十人の歯は全部で千六百本になるが、治されていない虫歯は一本もないという結果であった。

私の少年時代は誰でも虫歯があった。いつでもどこかの歯が痛かった。合わない靴に自分の足を合わせるように痛みに慣れさせられた。最初の詰め物は右下の奥歯であった。

天竜川にかかる橋の向こうに歯医者があった。暑い夏の日であった。田舎の歯医者丸首シャツ姿で汗を流しながら私の奥歯を治療した。

少年だった私の歯を削った。「しまった」と言った。「折れちゃった」と言って「折れちゃった」を繰り返した。雷のような痛みに襲われた。そして神経を抜いて歯を抜いた。

そこには水銀を含有するアマルガムという金属が詰められた。「一円硬貨二枚ぐらいの量になりますね」と、削りだした歯医者が教

えてくれた。

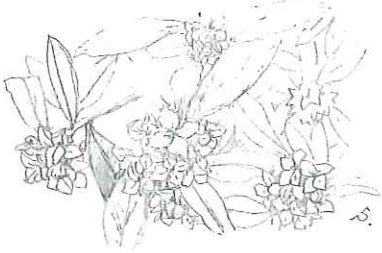
青年期にも何本か歯を抜いた。人は一生を通じて様々な痛みに出会う。

私の青春時代は心が痛い日々であった。傷つけて傷つけられた。私は心の痛みの伝達細胞を除去して欲しかった。

神経を抜いた後の歯は生涯にわたって痛みを感じない。私の今回のセラミックスへの入れ替えには、どの歯も全く痛くなかった。

今の学生たちは優しい母親に、心の痛みの細胞を抜くようにして育てられたに違いない。数カ月かけて私の体内の全ての金属は取り除かれた。

しかし皮膚はまだ痒い。



井口昭久 1943年長野県生まれ。名古屋大学医学部卒業後、同第三内科入局。愛知医科大学講師などを経て'78年ニューヨーク医科大学留学。'93年名古屋大学医学部老年科教授。名古屋大学医学部附属病院長を経て現在、愛知淑徳大学教授、名古屋大学名誉教授。『鈍行列車に乗って一医者人生ソロソロ帰り道』(風媒社)など著書多数。